

早船ちよ著 * 長編小説

ちさ・女の歴史

第5部=炎群の秋

理論社刊

0393-91105-8924

© Chiyo Hayafune Printed in Japan

1979年初版

ちさゝ女の歴史 第五部 炎群の秋

一九七九年十月 第二刷

著者／早船ちよ

制作／小宮山量平

発行者／山村光司

発行所／株式会社理論社

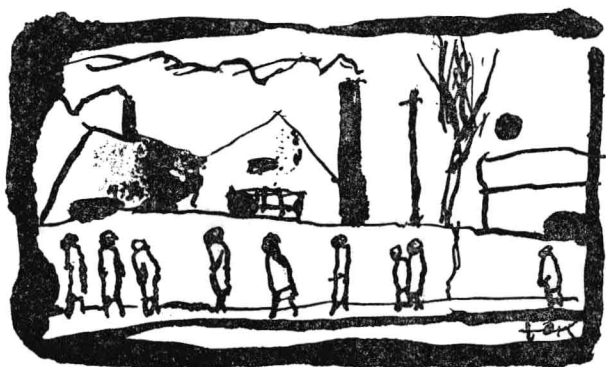
東京都新宿区若松町一〇四

電話(03)二〇三—五七九一

郵便番号 一六二

振替 東京九—九五七三六

乱丁・落丁本はお取替えいたします。



ちさ・女の歴史Ⅱ第五部

* はじめに *

—— 若いからって

とんこ とんこ 弾みすぎるな

夏挽き

マユの 出さかり

—— そう あおりたてるな

ついてけなくて

辛がっている衆も いる

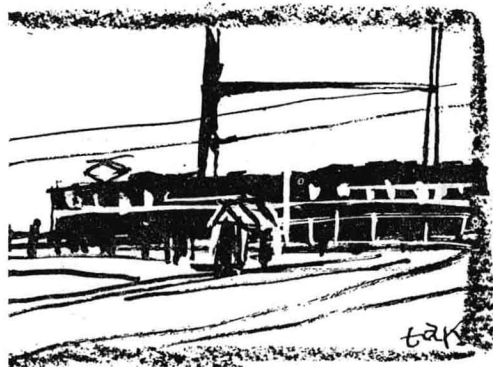
油照りの 陽は まうえ

風の とおりみち

ほれ！

山バトの ふくみ声

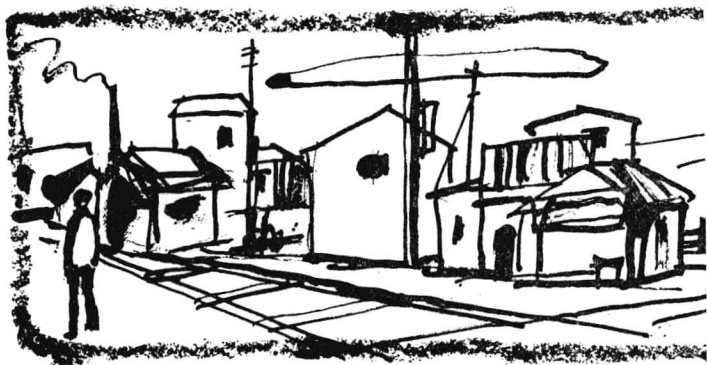
炎群の秋／もくじ



はじめに／1

第一章

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
新人の集い	男衆にえこひいき	血染めの繭	あとを追うもの	連帯線系法	とんことんこ弾みすぎるな	話せばわかるか	小さい同志	わしらの季節	ボイラーに火が
145	120	107	102	84	70	53	43	25	5



第二章

11	霧ふかい甲州街道	163
12	養蚕農家は怒っている	173
13	兄おとうと	196
14	山姥の宿 やまうば	212
15	おやじの夢	227
16	亡母とおもって	236
17	きょうもまた力のかぎり	252
18	みっちり仕込んでやる	264
19	走る	290
20	カフェー「星と堇」	301
21	思い知らせてやる	307
22	炎群の秋	323
そうてい・カット 鈴木たくま		



* 編集部より

さきに作者は『峠』『湖』『街』の三部作を、発表した。
(いずれも一九六六年)

当時ひと息いれた上で、この長編をさらに書きつく予定であったが、ここに十三年の歳月を経て、『冷たい夏』『炎群の秋』『熱い冬』が一気に書きあげられ、全六部の連作が完成した。この機会に、連作の総括題名を『ちさ・女の歴史』としておくことにした。

第一章

* * *

1 ボイラーに火が

そのあさ。

乾燥場のボイラーに、火がついていた。

焚き口の炎が、五月のすがすがしい風に旗のようにゆれ、投炭口の鉄板がすべるたびに、ばらばらと粉炭が火床へおちていく。

「ああ、やっとではじまる！」

ちさは、乾燥場へいそぐ足をとめて、ボイラーの炎に見とれる。

—— 藪の乾燥がはじまる。きょうからこそ、ほんものの労働者らしい生活がはじまるのだ。馴れているものでもこたえるという、乾燥季の重労働である。考えるだけでも、ちさは胸がわくわくと昂ぶってきて、「わあ！」と、大声で叫びそうになる。

乾燥場の大煙突からは、いま、黒い煙が気おいたって、もっくもく、立ちのぼっていく。

「おい、ちさちや！」

風のようにふっとんでくるなり、キンが後ろから抱きついて、乱暴に肩をゆすぶった。

「見たけ、おめさん」

「うん、ボイラーに火がついたわね」

「ね、ねっ、なんて長い冬ごもりだったじゃあ、毎日、まいにち、マユ袋のぼろつぎばかり……」

十九歳のキンの目が、ちさをのぞきこんであけっぴろげの笑い声をたてる。

「そうよ、そうよ。わたしだって、なんぼうあきあきしてたか……うれしいっ!」

ちさは、キンの骨太のがっしりした手をにぎりしめた。キンは、一昨年おとしまで浜で石炭かつぎの仲仕なかしをしていた。肩幅もひろく、腕の肉づきもよかった。

「まあ、ちさちやったら。——あんた、こんな細いやさしい手で」

キンは、ちさの青白いゆびをなでさすって頬ずりをする。つい半年前まで、ちさは母の仕立屋を手つだって縫物ばかりしていた。

「なしてこんな手で、繭むすめかつぎができると」

「ばかにせんでよ。何だっしてしてみせる」

塀のそとで、けたたましいトラックのサイレンがきこえてくる。生マユのトラック第一号である。山のように積みあげた竹かごを、ゆさゆさゆすりながら、片貝組製系下諏訪工場の正門からまっすぐに、乾燥場へ入ってきた。

「きたよう、きた、きた」

ちさが、トラックへ向かって走る。そのあとから、キンが叫びたてて、かけていく。

「繭めえがきたよ、繭がきたよう」

「なんだって? 繭だって」

「マユ、マユ！」

雑役婦なかまの、イネ、雪江、とも枝、才子らが聞きつけ、いちばん後ろから駒が悲鳴をあげて、口ぐちにわめきながら乾燥場へ向かう。

倉庫主任の矢ガ崎大三は、もう繭乾燥場の荷受けで待ちかまえていた。トラックがとまるのを待って身軽に荷台へとびついて、よじのぼるのだった。

そして、荷縄のしぼり目もとかずに竹かごの一つから、ズックの繭袋の口をひっぱりだして、せっかちに手をつっこむ。

「ほお！ いい繭だなや」

感にたえぬふうに、見とれる。猿のような小男の、しわばんだ大きなてのひらに、生ぐさい、しつとりと重い繭が光っていた。

「まあ、きれい！」

ちさには、五、六つぶのそのどの繭も、マユをつくっている細い糸が底光りを放ってみえた。乾燥主任の平川秀夫が、乾燥場のはしごのかげから、のっそり出てきた。矢ガ崎大三から繭の一粒をうけとり、仔細にながめている。二十六歳の彼の額には、老人じみたたてじわが、きつく刻みこまれている。

乾燥副主任——平川の弟ぶんの若杉茂は、トラックの助手席から、両腕いっぱい繭をかかえこんで降りてきた。

「おいでなすったぞ。へい、いよいよお待ちかねのお客さまがおいでなすったぞ」

二十歳になったばかりの坊主あたまの彼は、少年のように頬を紅潮させて、繭に頬ずりをし

てみせる。

「マユを拝ませてよ、若杉さん」

雑役婦たちは——駒も、ちさもキンも、才子も、雪江も、四十歳ちかいイネやシノまで肩をくみあって、若杉の手の繭をのぞきこんで、陽気な笑顔で、ほう、ほう！と嘆声^{たんき}をあげ、喜びあうのだった。

「ほう！ 美しいねえ、後光^{ごこう}がさしてるじゃあ、このマユ」

「よっぽどの骨おりえ、これまで、りっぱに上げるのは……養蚕家はやせちまうよ」

しみじみと、繭に見いつていた才子が荷札をしらべにいつて叫んだ。

「山梨県北巨摩郡武川村……まあ、おどろいた！ このマユは、となり村の敏ちゃんちで出したのえ——たいへんだ、これじゃ、うちのお蚕^こさまも、じき上がるわ」

才子の血色のわるい頬が、ぱっと上気する。

正月休みに帰ったとき、才子の老父は、

——ことしの上がりは百貫とみて三百両になる。肥料代、種子紙代、桑葉代など、しっかりと差し引いても百二十両のこるかんじょうだ——と、いつていた。

——百二十両……これは、才の嫁入り支度にくれる。才にも長く稼がせて、ずいぶんのびのびにしていたから。

才子は、そのことをへ誰にも、ないしょえ、あんたにだけ……と指きりをして何人かに話した。新参のちさや駒にさえ、へ十年勤続したものの、ねと、いわずにはいられないのだった。雪江にだけは、そっと「もしかしたら、そうらしいのよ。……生まれるとなると、父も決

心したらしいの」と、打ちあげたのであった。

*

「運転手さん、いくらえ？　はつ相場は」

雪江が、一重^{ひとえまたた}瞼の目を、きつと見はった。彼女の兄は上諏訪で、繭のブローカーをしているということを、ちさは知っていた。

雪江は、いかにも玄人^{くわうじん}らしい手つきで、一粒の繭をしらべて見ている。

「はつ相場け？　ふつうならご祝儀^{しゆぎ}相場で、花を持たせたいところだがね」

運転手はトラックの上から平川のほうへ、荷縄をポイと投げてよこしながら眉をひそめた。

「割ったかね、三円を、え、わったろう、運転手さんや」

「二円五十四銭だ。とんでもねえことさ」

「ほんとけ？」

瞬間、才子は青ざめて、こめかみを押える。

「二円五十四銭。うそじゃねえよ。養蚕農家は葬式だすように泣いて繭^{めえ}をおくりだしただ。せつねえったらなかっただ」

平川が、暗い目でうなづく。

「去年のはつ相場は、三円八銭。それでも、貫あたり生産原価を七十銭も割ったって大さわざしたずら……。それとくらべてもことしは、ずんと安いからね」

「ほんとうに、ほんとけ？」

才子が、睨^{にら}むように白い目をむいた。とたんに、ぐぐーっと吐^はき気が胸^けもとからこみあげて

きた。

「なにィ、なんだって、え、え？」

矢が崎大三は、あわてものだ。すぐ血相をかえて、目をむく。

「二円五十四銭だって。こんないい繭めえがよ。もってえねえなあ、平川さんや、女衆や。こんな馬鹿なことがあっていいのかよ」

「してやられたんだい」

平川が、投げだすようにいった。——池田場長の予測どおり、相場は動いていく——と、彼は嘲笑をうかべている。

「だれに、してやられたのさ、平川さん」

イネが、きつと目をあげた。イネは、しゃがみこんだ才子の背なかをさすっていた。才子に、もしかしたら、つわりがはじまっているのかもしれない。

「誰に……って、ジャーリィってアメリカの相場師にさ」

平川は、まわりをとりまいている女衆に、いつもの兄くもきのような口調で説明するのだった。

昭和六年度の日本じゅうの滞貨たいかき生糸いとが、二十万俵あまり。その半分にあたる十万七千俵を犬養政府は、児玉正金銀行頭取のあっせんで、神戸の生糸輸出商旭シルクKKの手をとおして、アメリカのジャーリィ商会へ売った。

ジャーリィ商会のプール工場であるくつ下工場・メリヤス工場でその滞貨糸を消化して、市場の相場をくずさないことが、ジャーリィ商会との約束であった。——ところが、半月たつたたない四月末に、糸価は五百十円まで下がった。一俵五百十六円以下の糸価が二十日以上つ

づけば、責任負担として一俵につき百五十円の保証金を没収するという契約があったが、その契約にははじめから矛盾むじゆんがあった。だから、その時期に直面しているいま、実行はあやぶまれている……。

「日本の製糸界はじまっていろいろの、すごいガラがおこるんだ」

と、矢ガ崎大三が、平川のことばをうけて、

「なあ、女衆や、運転手さんや。大ばか野郎の山本農林大臣が、とんでもねえ糸価安定策をやらかして、このあとしまつ、どうしてくれるだ」

運転手は、伝票をもって荷受へおりてきて、いう。

「生産原価一円二十二銭わるとへい、百貫取りの養蚕家で百二十二円の背負しよいこみだかね……やれやれ、ご苦労なこんだ」

「しかし、まだまだ、ゆすぶられっぞ」

と、矢ガ崎大三がどなると、若杉は、くったくなさそうに笑っている。

「さがるの、もっと？」

才子が、悲鳴ひめいをあげる。

「さがるとも。さがる、さがる」

平川は、ブック袋を肩あてにして、さいしよの蔵かごを受け、ゆっくりと荷受へおろす。

「重たいぞ、ずっしりと重てえ。ことしのマユは」

「うちでも年寄ふたりで夜の目もみずに、お蚕こさまを飼ってるがね」

と、運転手がいった。

「百二十二円の背負いこみずら。おれの妹が糸とって一年ぶん稼いだのが、すっかり、ふいになるだ。惨めで見えておれるかよ」

「売りいそいでいるかね？」と、矢ガ崎大三がきく。

「農家でも先を見こして売りいそぐからね。叩き売りも叩き売り、ひでえもんさ」

「そうだよ。大手製糸のおたくあたりが、まっさきに立って買い叩くからだよ」

運転手は、荷縄をひとまとめにからげて、トラックの荷台へほうりあげげる。

「しょうがねえずら、なあ。糸価が一日ごとに下がってるんだもの。繭価だって下落する。おっかけっこだ、あっぱっぱはは」

矢ガ崎大三は、大口あけて笑いとぼし、いつものせっかちさにもどって貫秤を荷受へ、がらがら、ひっぱってくる。

「泣いてなんかいられやしない、才ちゃん」

雪江が、口をとがらす。

「あんたら、工場は、ことしや、えら繭を買いこむえ。買って買って、買い叩いて、どんどん生糸にひかせる」

「ふん、去年だって、えら買いこんださ。——ことしいっぱい、糸にひくぐらいは倉庫にしまつてあるじゃあ」

とも枝が、ぷうつとふくれて白い目で、見かえす。

雪江は、ちらっと平川、若杉、矢ガ崎をながし目で見てから、ちさへいうのだった。

「覚悟してな、ちさとお駒さ。ことしは、かくべつ千載一遇え。いままで考えられなかったほ

ど安いもの。これ以上安くなりっこない繭を、どんどん糸にひかせて、糸価がでるまでねかしておく。糸にひけないぶんは、いくらでも乾燥してしまっておく……そういう腹え、工場は」繭不足の冬場になってから、ストックの乾繭を売るだけでもえらい儲けだ——と思うと雪江は、足ぶみしたくなるほどじれったい。

兄は、自転車とリヤカー一台の借家住いの町のブローカーにすぎない。とてもとても、繭を倉庫にねかせて品がすれ待つ資力など持っていない。

「働かされるね。この夏は、みんな追いまくられるぞ」

キンが、はでに高笑いし、いたずらっ子らしい目くばせを、ちさにおくる。

——わたしには二度め。この娘にとつてははじめての乾燥季である。きゃしゃな細いゆびが、それに耐えて働きとおせるか、どうか。

「めちやくちやだね。ああ、情けねえこんだ」

才子が、青ぶくれた頬をゆがめて、ヒステリックに叫ぶ。

「わしらあ、クズの雑役婦なんかして稼いでも何にもなりやしない。家で、こんなバカ値で、マユを叩き売ってるんじや……こら、あんた、ちさちや！」

竹かごをのぞいていたちさは、才子の骨ばったひじで、こっぴどくこづかれる。

「ばか！ 繭じやなしか」

才子のゆびさが、怒りのために、ぶるぶる、ふるえている。

「踏んづけるなし、もったいない！」繭は、びしゃとつぶれて黒く、みがにじんだ。はっとおびえて、身をすくめたちさへ、

「町そだちには、繭^{めえ}つくりの苦勞が分んねえってさ」
とも枝が、冷たい笑いをうかべている。

*

「運ぶぜ、それ！」

平川が気合をかけるのと、運転手がトラックの上で「降ろすよっ」と身がまえるのと、いっしょだった。

「よっしゃ、さあこい」

若杉が、ズック袋を肩にあてて中腰になり、ずしっと重たい繭袋に、ふんばった。
トラックから荷受けへおろされた繭かごは、つぎつぎ貫秤にかけられる。

「えーと、九貫とんで五十匁」

「はいよ、九貫とんで五十匁！」

平川秀夫が、しゃがんで貫秤の目盛^{めもり}をよみ、矢ガ崎大三がそばに立って鉛筆をなめなめ、伝票へ記入する。おばさん格の山本シノが、繭かごを貫秤からおろす。

それぞれの役割は、去年、おとし……いや、ずっと前からのしきたりできまっていた。秤りおえた繭かごは、雑役婦たちが二階の乾燥室へ、階段をのぼって担^{かつ}ぎあげる。

いちばんはじめの繭かごは年かさの田所イネが、そのやせ腕でつかまえた。

「おつぎは、十一貫と六百匁」

平川の声は、景気づいてくる。

「さあ、おいでなさい」